

就業力育成科目の磨き方を考える —学内教員10人の教育ノウハウに学ぶ—

白井正樹

Considering Steps to Improve the Classes for Employability Skills Development : Input and Guidance from the Ten Faculty Members on Campus

はじめに

本稿は、就業力育成科目の磨き方を整理したノウハウ集である。具体的には、就業力育成科目の講義を聞いた学生の多くが、「この講義は、面白く、有意義な学びが多い」「社会で働く力の強化に繋がりそうだ」と感じ、それを機に学生自らが進んで「社会に出る前に、更に就業力に磨きをかけよう」と前向きな動きに繋がるような（いわば“学びの心に火を灯す”ような）講義に仕立てあげるため、本学のベテラン教員が具体的にどのような工夫を講じているか、そのノウハウを取りまとめたものである。ノウハウを提供いただいたのは、学期末に実施される授業満足度評価アンケートで高得点を獲得された先生方10名¹⁾である（各学部から2名、5学部で計10名）。

本稿の執筆動機は、本学の教育力底上げのためには、FD活動だけでなく、年報等を活用し、教員間で情報共有することも有益ではないかと判断したためである。更に、本学の学内委員会の一つである「就業力育成授業改善検討WG」では、就業力の強化に取り組んできているが、このWGが展開する様々なPDCAサイクル活動の一環にも資すると考えたためでもある。なお、後者のWGの活動はこの研究ノート執筆の契機にもなっているので、この点について簡単に触れておく。本学のFD委員会の下部組織である同WGでは、かねてより「就業力教育の更なる磨き上げを図るための方法論」について意見討議を重ねてきた。それを具体化する一つの方策として「学生評価の高い教員のノウハウを聴取し、それらを学内で共有することを通じて、就業力教育の強化に向けたPDCAサイクルを回すことが不可欠である」と

の内容で意見集約が進んだ。そこで、同WGでは、2022年度上期の授業評価アンケートを基に、各学部の高い満足度評価を獲得した教員を選び出し、2023年3月下旬から4月上旬に、WG委員長（筆者）と各学部のWG委員の2名が、上記10名の先生方に個別ヒアリングを実施した。こうして集約した聴取内容については、本学のFD研修会（2023年11月）で総括のうえ、既に学内共有を行っているが、今後、得られた知見を学内に更に浸透させ、本学の教育レベルの底上げに向け、強くアクセルを踏み込んでいきたいとの思いから、本年報にも投稿することとした。

本学の就業力教育の体系は、大きく“4つの力”（基礎学力分野、専門知識・技術分野、人間的成長分野、社会貢献実践力分野）を軸に柱立てしている。以下、各々の分野毎に、どのような教育ノウハウがあるかを順に整理していくことにするが、“4つの力”に親近感を持って頂くため、“基礎学力、専門知識・技術分野”を“Knowing”、“人間的成長分野”を“Being”、“社会貢献実践力分野”を“Doing”という、耳に残りやすいキャッチ・フレーズ的なワーディングを当て込んで説明することにする²⁾。

I Beingを磨く

Beingとは、Be動詞の動名詞で、日本人にはやや馴染みの少ない使い方かもしれないが、その意味は「自らの価値観（ありたい自分）」、「信念（自分の存在価値）」、「決して忘れてはいけない、自らのアイデンティティ」という意味合いに解釈してよい言葉かと思われる³⁾。就業力育成科目では、このBeingを講義内で織り込むことが求められているが、具体

的には「あなたは何のために社会で働くのか」という、いわば就業力教育の原点とも言える考え方を学生に教えることが要請されている。ただ、これを学生に説いていくことは中々難しい。なぜなら、学生の思いは百人百様だからである。つまり、4年生でも無目的・無気力な学生が少なからず存在する一方、1年生のうちから明確な目的意識を持って学んでいる学生もみられ、両者混在しているのである。そんな中、就業力科目を担当する教員は、学生の就業意識の濃淡を測りながら、意識付けを行うことが求められるわけで、難しいのは当然と言える。そこで、教員がこうした理念や信念を学生にどう落とし込むのが学生に共感を与えるのか、その一つのプロトタイプとも言える教育ノウハウを3人の先生方から窺った。

1. 無目的・無気力系学生のやる気をどう鼓舞するか

無目的・無気力な学生に対して、如何に仕事の意義を説き、彼らのやる気に火を点けるかが、就業力教育の一つの課題となる。仕事の意義ややる気の喚起と言っても、学生にとっては手触り感の伴わないテーマだけに、どういうアドバイスが学生の心に最も刺さるか、難しい論点であるが、就業力教育を担う教員にとっては日頃から深く考えておくことが望ましい基本哲学とも言える。こうした難しい論点について一つの模範解答を下さったのが経営情報学科の疋田教授である。疋田先生は、下記の2段構成で学生に「働くこと」の意味を説くことで、無気力系の学生を鼓舞し、「志」を持たせるというアプローチを採っておられる。

【疋田流・教育内容】

※以下は疋田教授のお話を直接話法調で記載した。

(1)働くことの意味を教え、志を見つけさせる

第一に「働くこと」とは、生計の確立そのものであることを伝える必要がある。社会人の基本姿勢は、自分で稼ぎ、自分で生きることであり、働くことは、自立して生きるための大前提である。第二に「働くこと」は社会貢献である。誰かに貢献できていると思えば、人は頑張れる。それが「働くこと」の意味であり、意義である。第三に、生計の確立・社会貢

献のため、自分はどう働くのかについて、自分なりの「志」をもって働くことが求められる。その「志」こそが、日々の「働く原動力」になる。

(2) “志”を実現するための「仕事」をどう見つけるかを教える

理工系の講義は、座学での理論の学びに加え、実験・実習という実体験が並行的に進められることもあって、将来の仕事のイメージに直結していきやすい。一方、人文・社会系の講義では、座学で説明や概念理解が主体になることから、中々、仕事に直結しにくいという限界がある。そこで、人文・社会系の学生には、現場経験・現場訪問を積んで視野を広げる必要がある。これが文系の学びの一つのあり方であり、現場経験が多いほど、学生の「目利き力」が磨かれ、「志」や「職業意識」を高めることにつながっていく。そこで、学生には、現場にとにかく出て、実体験を積み上げるよう指導する。

2. 意識高い系の学生のやる気をどう鼓舞するか

一方、意識高い系の学生の心に火を点けるためにどういう言葉掛けが出来るのか、教員はそういう学生に対する指導の言葉も準備しておく必要があり、その模範回答の一つを提示して下さったのが健康栄養学科の岩田教授である。具体的には、既にやりたい仕事（目指す資格）は定まっているものの、常に前向きな意欲が続くとは限らず、時には勉強意欲が中々出てこない場面に遭遇する学生が少なからず存在する。ここで扱うのは、こうした学生に対して、教員がどう声掛けや指導を行うのがよいかという論点である。こうした難しい論点について一つの模範解答を下さったのが岩田教授であるが、下記の2段構成で学生に「前向きな意欲」を持たせる工夫をされている。

【岩田流・教育内容】

※以下は岩田教授のお話を直接話法調で記載した。

(1)職業イメージを刷込む

指導学生は、主として在学中に管理栄養士資格を取得し、社会では病院・高齢者施設・学校（給食）の栄養管理業務を担う仕事を想定している学生が多い。そこで、こうした学生に対して、「あなたたち

の社会的立場は“大切な人の健康を守るために頼りにされる存在”である」という刷込みをしっかりと行うことが大切になってくる。その上で、管理栄養士という自らの立場が社会の中で如何に重要な機能を果たすのか、その重要性についてしっかり自覚させることが出発点となる。

(2)管理栄養士に問われるもの、およびその意義を考えさせる

次に、管理栄養士の仕事の意義や立場を念頭に置かせた上で、“学びの大切さ”を理解させることが意識を高める上で重要なポイントになってくる。具体的には「人の力になる」「人の頼りになる」「人の役に立てる」「人のためになる」と言った切り口で、学生に「社会で働くことって重要だよ」と語りかけつつ、仕事を持つ「意味」を共有し、「知識があれば人の役に立てる！そうならば、知識をちゃんと持とうよ」（だから学び続けることが大事なんだ）とヤル気を喚起する語りかけをしていくことになる。

また、“リアルな失敗談”も学生の心に火を点ける大事な教材話題になるので、医療機関での勤務経験において自らの周囲で起きた失敗談も教材として活用していくことを心掛けている。例えば、甲状腺を患った患者に、ヨード制限食の提供が指示される場合があるが、常食を誤配膳してしまったという先輩の大失敗も講義で使う一例である。話のポイントは、ヨード制限不足では予定されている検査や治療の実施延期を余儀なくされることから、発覚後にはドクターから『患者を殺す気か！』と罵倒されたという話などを使う。患者の治療成績に不利益を及ぼすことはなく事なきを得たそうだが、更に話をそれで終わらせるのではなく、自ら（岩田教授）の失敗をもそれに重ね合わせて、学生に教訓として学生に染み込ませる工夫をする。具体的には、自ら（岩田教授）がかつて軽微な誤配膳をしてひどく落ち込んでいる部下に対し、「食事では死なない」からと励ましてきた点に触れ、上記の事件を機に、過去に伝えてきた自らの発言が間違っていたことを明言し、“誤配膳は患者に大きな不利益を与え、リスクになる”という教訓と、治療に直接的に関与する食

事・栄養管理を担っているという責任感を重ねることで学生指導をしている（この点に関して筆者の思いを付け加えると、筆者も講義で自らの失敗を教材として学生に話すことがしばしばある。この際、学生は、その教師をダメな教師と思わず、むしろ自分の過去の失敗談を学生に示すことがかえって学生の信頼感を高めるようである。実際、学生のアンケートを読むと「自らの恥ずかしいミスを引き合いに出してまで自分達を育ててくれる、温かみのある先生だ」と前向きな受け止め方を示してくれるケースが少なくない。岩田教授もこうした“素の自分”をあけっぴろげに学生に示すことのプラス効果を感じておられるからこそ、こうした指導方法を取り入れておられるものと感じた）。

3. 意識高い系の学生に対して“仕事との向き合い方”を考えさせ、更に磨きをかける

学びの火を点けるためには、学生のうちから、仕事との向き合い方を教えこんでいくのも重要な学びとなる。ここで、興味深い工夫をされているのが、看護学科の小川教授である。看護は患者の命を預かる仕事だけに緊張感の高い、厳しい仕事に違いないと素人の筆者などは推察するが、小川先生は「“仕事は厳しい”という話だけだと心も縮む。仕事に手触り感をもたせつつ、仕事の楽しさ・遣り甲斐を説いていくことも重要である」との考え方にに基づき、以下の3段階構えで学生を教えておられる。

【小川流・教育内容】

※以下は小川教授のお話を直接話法調で記載した。

- (1)学生には先ず仕事のイメージの刷込みを図る。多面的な説明を展開し、できる限り実際の臨床事例を取り上げ（リアル感は必須要素）、写真・動画を活用し（手触り感も必須要素）、具体的ストーリー（教員自身や上級生の失敗談、苦勞話、褒められた話が効果的）を織り込みながら、現場のリアルを紹介することで、看護師のイメージを浸透させる。
- (2)次に、こうしたイメージを念頭に、就業の心構えを説く。特に重要なのは「人の役に立ちたい」「人の世話をしてあげたい」が看護の原点であること

を強調しつつも、「ただ人に言われたことだけを、作業のようにしている看護師は低レベルである」（自らで考え、自ら動くことができる看護師こそが評価される）ことをしっかり伝え、実社会で貢献できる看護師像を説明する。

- (3)最後に、仕事の楽しさ・遣り甲斐を説く。具体的には、看護師の遣り甲斐や楽しさは「相手に感謝されること」であり、それが看護師が目指すべき目標にもなることを自覚させる。

II Knowingを磨く

Knowingは、基礎学力、専門知識・技術分野の習得に力点を置く講義のことを表現しており、アカデミアそのものの世界とも言えるが、いずれの先生も、アカデミアの要素に就業力教育の要素を載せることを意識して、独自の工夫で講義を展開されているのが特徴である。以下では4名の先生方の教育内容を紹介する。

1. 学びの鳥瞰図を示す

学生にとって、講義の中で新たな知見や技術を修得していくことは、知的刺激の面白さを得られる一方、未知なる知識を否応なく降り注がれるという点で苦行に感じる学生も少なくないと思われる。しかし、工夫を凝らすことで、苦行という思いを抑止できる。その工夫とは、教員が学生に対して、予め“学問の鳥瞰図”（今から学んでいく学問内容に関する俯瞰的な全体像）をしっかりと示すことであり、この点を強調されるのが、人間健康科・坂本教授、看護学科・小川教授、同・田村教授である。いずれの先生方も、広大な学問の森の中で、学生が迷子にならないための工夫として、初回講義の時間等を活用して、カリキュラム・マップやシラバスを使って、道案内の時間を設け、学生の目の前に広がる“不安の暗雲”を晴らす工夫をされているのが特徴である。以下は、2段構えで“地図を学生に説明”しておられる坂本教授の事例を示す。

【坂本流・教育内容】

※以下は坂本教授のお話を直接話法調で記載した。

- (1)全体像を語る

初回講義で、大きなマップとも言えるカリキュラム・マップを使って、就業力4分野（基礎学力分野、専門知識・技術分野、人間的成長分野、社会貢献実践力分野）との紐付けを意識しながら、「担当講義の立ち位置と展望（今後の歩み）」を学生に明確に示すことにしている。同時に、自らの担当科目の立ち位置だけではなく、他の科目の位置付けにまで視野を広げ、上記4分野の力とも紐付けながら、“食物栄養”という学問分野の全体構造を体系的に俯瞰し、学生の皆さんが、この先どういう歩みを展開していくことになるのか、その道筋を予め提示する。

(2)部分を語る

上記説明に加え、自らの担当する講義のシラバスを使って、15回講義のマップを説明する（カリキュラム・マップを「全体」と認識すれば、担当講義はそれを構成する「部品（＝部分）」に位置づけられるが、その部品がどういう建付けで15回を歩んでいくのかを語る）。これによって、学生の抱える不安感を晴らし、学問の森における学生の迷子防止を防ぐことを狙うことになる。

2. 足し算教育と引き算教育

教育とは、知識・技能・技術を積み木のように積み上げていくもの（足し算的なもの）と筆者などはついつい思いがちである。しかし、職業人を育てるためには、学生の特性を丁寧に観察した上で、学生の抱える“余計なもの”を取り除いてあげる引き算的な方法も取り入れていく必要があると指摘されるのが、書道文化学科の森上教授である。森上教授は以下の3つのプロセスを講じることを通じて、学生の能力を磨き上げて就業力を強化する教育に取り組んでおられる。

【森上流・教育内容】

※以下は森上教授のお話を直接話法調で記載した。

(1)学生の特性を把握

書の世界で生計を立てていく力（就業力）のための特性として、どんな能力を、どの程度持ち合わせているかについて、学生毎に見極めるのが教育の出発点となる。

- (2)足すべきものと、捨てるべきものが何かを特定

次に、彼らの能力を今後どう育て、磨き上げていくために、能力・資質に関する方向性について、大きく2分類（足すべき能力と捨てるべき能力）に分ける。今の力に“足すべきもの”としては、多くの場合、①書の技術、②文章力、③コミュニケーション力、④柔軟性（様々な書の技術を取り入れる懐の深さ）、⑤クリエイティビティ（新たなに書の技術を創造していく力）である。一方、“余計なもの（捨てるべきもの）”として、典型的には、①頑なさ（自分が良かれと思った書の技法から離れようとしないう頑固さ）②拘り（過去、賞を獲得した筆遣いに対する執着心）、③自己流（創造性が大事という思いもあってか、自分勝手な我流のスタイルに拘る等）である。

(3)教育方法をオーダーメイドで考える

こうした分類を経た上で、教員の役目は、不足を補い、余計を取除くためにどういう教育がベストかを念頭に置いた上で、ここから学生の特性に応じた教育がスタートすることになる。

3. 取りこぼしの無い講義の実践

国家資格取得を念頭に置く看護系のような講義では、資格試験の出題カバレッジに完全準拠する体系的かつ網羅的な教育指導が不可欠である。この点、高い緊張感と強い達成意識を持って、講義を展開されているお一人が看護学科の田村教授である。

【田村流・教育内容】

※以下は田村教授のお話を直接話法調で記載した。

看護師国家試験の出題基準については、改訂が行われる都度公表され、12領域から幅広く出題される扱いになっていることから、大学の講義体系（学部の授業配分や講義内容）もこれに完全準拠することが不可欠になってくる。万一、十分にカバーできていないとなれば、直ちに合否に響いてくる問題だけに、取りこぼしは許されず、入念かつ綿密な講義設計が不可欠。教師にはそれだけの責任感が求められる（高い規律意識と緊張感を持ちながら講義に全力を注いでおられる田村教授の姿勢をくつきりと浮かび上がるよう、本来は表現すべきところであるが、筆者の表現力の未熟さゆえに、その迫力と気迫を十

分に文章で表現しきれていない点をお詫びしつつ、読者の皆様には筆者の思いを汲んでいただければ幸いです（である）。

なお、以上のような当たり前のような話を筆者が敢えてここに記載したのは、本学の他学部の講義に目を転じたとき、残念ながらこうした規律意識と緊張感が十分でないまま講義が展開されているケースが一部に見受けられるからである。すなわち、公的資格との強い紐付けがあってしかるべき講義において（現に本学入学案内等では資格取得を謳う説明内容がある中で）、「資格試験に必要な学びがカバーされないまま講義が終わった」等の学生の不満（授業評価アンケートに記載された学生の声）が寄せられている現実があるからである。勿論、担当される教員の先生方には何がしかの講義理念があるのかもしれないが、そうした学生の真摯な声に折り合いをつけ、満足度の高い授業を提供するよう教員側も努力していく姿勢を持つことが、本学が末永く地元で愛される大学になっていく上で重要ではないかと思われる。

4. 新技術の活用

近年、IT技術が様々な形で進化し、我々の日常生活に便利な機能を提供してくれるようになってきたが、学生が楽しいと思う講義、食いつきの良い講義を提供するために、こうした最新技術（AIや動画）を活用しておられるのが短大・音楽科の川内教授である。

【川内流・教育内容】

※以下は川内教授のお話を直接話法調で記載した。

音楽指導法（本学学生が、将来、“音楽教室における講師”等、教える立場になり、教室の生徒に音楽指導を行う場合、どう教えれば効果的か、その方法論を探究する授業）を担当しているが、そこでは、教材の作り次第で指導効果も変わってくるということを学生が実践的に学ぶのも一つの課題である。例えば、音楽の世界では“主音”という「音階の基準となる音の役割」をどう教えるか、その指導方法を探究することが大切な課題の一つといえる。そうした講義では、単に、言葉で“主音”の意味内容を

言葉で定義するような通り一遍の指導法では、その講義を受講する音楽教室の生徒の関心が高まらないし、理解度も深まらない。指導法の講義では、先ず、この当たり前の事実を学生と共有する。その上で、その対照的な指導事例として、近年、急速に普及しているAIを活用した動画（主音の役割を具体例で示した童謡を題材にした歌入り動画）を使った教育指導の効果を考えさせ、“音楽教室の生徒の食いつきを高めるには、こちらの方が優る”ことを実体験させる——そんな講義を展開している。ちなみに、そこで使う動画の内容は、動画の歌声部分を担当するのは人間の声ではなく、NEUTRINO（ニュートリノ）というAIを使ったもので、音符と歌詞情報のみで人間っぽく歌うソフトを活用している（なお、川内教授によれば、AIを活用した歌入り動画は、こうした技術に長けた短大・音楽科の小田原令幸講師が作成され、これを川内先生が講義で活用されるという連携が学科内で出来ているとのことであった。筆者の印象になるが、音楽科では、最新知識を持つ若い教員と授業力の長けたベテラン教員との連携がうまく教育効果の向上に繋がっているとの印象を受けた）。

Ⅲ Doingを磨く

Doingは、社会貢献実践力の分野、すなわちコミュニケーション力、チームワーク力、社会貢献力等を高める講義である。この点についても、多くの先生方が就業力教育を意識して、興味深い講義を独自の工夫で展開されているのが特徴である。以下では4名の先生方の教育内容を紹介したい。

1. 教員は「わかる授業」を目指すべきか

教員の目指す授業は「わかる授業」（知識を吸収できる授業）であるべき——こうした固定観念に長く縛られてきた筆者にとって目から鱗であったのは、看護学科の小川教授の考え方である。小川教授によると、看護系では、上記考え方は必ずしも正しくなく、目指すべきは「できる授業」（知識を使える授業）であるという、大きく異なる価値観を提示して下さった。小川教授は、担当される看護系の講

義を軸にお話くださったが、この考え方は恐らくほぼ全ての就業力育成科目に通じる考え方ではないかと思われる。

【小川流・教育内容】

※以下は小川教授のお話を直接話法調で記載した。

(1) “わかる授業” と “できる授業”

看護系の授業を例に、“わかる授業” と “できる授業” の違いを表現すれば、「わかる授業」とは「看護について、それを知識として“理解”と“学び”を追求する授業」（筆者流に言えば、知識を“吸収”する授業）と言える。それに対し、「できる授業」とは「看護について、その知識を土台に、実践を追求する授業」（筆者流に言えば、知識を“使う”授業）と言える。（筆者の率直な感想を申せば、就業力教育を念頭におけば、小川先生の考えは至言と言える）。

(2) 具体的な実践方法

では、教員がどのような方法で「できる」に持っていくのか（＝学生の実践力を磨かせるように持っていくのか）、その具体的方法論を、例えば「患者（小児病棟で入院中の幼児）への“近づき方”を学ぶ」というテーマで話すと、「知識」を学ぶだけの講義ならば「看護師が幼児に初めて関わるとき、怖がらせてはいけない」という心構えを教科書で学んで終わりである。しかし、実践の要素を加える講義では、これで終わってはならない。「教科書には確かにそう書いてある。では、その教科書の知識を基に、子どもにどう接するかを具体的に見せて！」と学生に具体的アクションを見せるように求める。つまり、子どもを怖がらせないために、看護師がどのような姿勢・態度・表情を工夫しつつ、子どもに話しかけるのか、これこそが看護師の卵たちに一番学んで欲しい実践の部分である。教員としては、こうした実践的訓練を講義で重ねていくことを通じて、学生に「看護の本質」を学んでもらい、看護という世界で「わかる」から「できる」に変えていくことが重要であり、こういう教え方こそが就業力を意識した講義になると考える。

2. 本物の現場実践力を修得させる

“習うより慣れる”という言葉があるが、それを地で行く指導を展開され、効果的に学生の“教職の実践力（小学校で児童を教える力）”を磨いておられるのが、児童学科の後藤准教授である。後藤先生は、将来、小学校の教員を目指す学生に対して、半期15回の講義（教科指導法・国語）で、様々な狙いを重ねた模擬授業の実践活動を通じて、学生を鍛えておられる。後藤先生の教育スタイルは、教員養成系の講義スキルとして活用できるだけでなく、他の就業力育成科目にも応用できるヒントが多々詰まっていると思われるので、以下、ポイントを紹介する。

【後藤流・教育内容】

※以下は後藤准教授のお話を直接話法調で記載した。

(1)主体的・対話的学びの重要性

教員は、一般に、板書を併用しつつ「言葉」を使って講義を展開していくことが少なくない。しかし、講義を聴く側（学生）の立場からすれば、言葉による一方通行的な説明だけでは、中々、頭に刺さってこない。そこで、学生自身に模擬授業を実体験させること（＝実践）を通じて、学生に自分自身で考えさせつつ、同時に学生同士の対話を通じて主体的に学ばせることで、本物の力をつけさせようと考えている。そのため、模擬授業には様々な仕掛けを重層的に仕組んでいる。

第一は、わかる・できる・楽しい授業を作るための工夫である。模擬授業では、①授業者（先生役）、②児童役、③協力者（授業者の考えを尊重しつつ、アドバイスを実施するほか、教材作成も支援する立場）の3つに役割分担させている。一般的に、模擬授業の実践といえば、“授業者を主役とする指導案発表型の模擬授業”を展開するケースが少なくない。しかし、（後藤先生の場合は）授業者に加え、他の2役にも役割と課題を課す、いわば協働型模擬授業を学生に意識させている。例えば、児童役には「児童の発展段階に応じた指導内容や指導方法であるか」を考えながら参加することを学生に求め、そうした児童目線を見た授業評価も、参加者同士の対話を通じて意見交換させる。なぜ、こうした取組みを学生に行わせるのか——それは、将来、学生たちが

教師として教壇に立ったとき、その授業を受けた児童たちが「わかる授業・できる授業・楽しい授業」と思えるような授業を展開できる力を修得させるためである。これが（後藤先生の）目指す、小学校国語科の講義における一つの基本理念なのである。

第二は、主体的・対話的学びである。この学びを学生の中に落とし込んで定着させるには、講義の中で展開される様々な学びを「教員（後藤先生）が説明する」のではなく、「教員が学生に考えさせる」ことが最も重要なポイントとなる（学生自身が、受け身ではなく、主体的・能動的に学びを修得していく行動を促すことが重要である）。そうすることで、学生は「自分で考える」ことが身に付き、理解が本物になる。その結果、「学生が問題意識をもって日々の講義を受けるようになる」ほか、「学生が目指すべきゴールを自ら考えて講義を受けるようになる」等、自覚的な学びの伴った授業に仕上がっていくことが期待できる。これを自分（後藤先生）は、主体的・対話的学びと呼んでいる。

(2)学び合いの場としての模擬授業

「主体的・対話的な学び」を有効に行うため、講義の進め方（講義の内容・中身ではなく、講義の手順そのもの）をパターン化しておくことも大切である。パターン化すれば、学生が主体的に模擬授業を進めやすくなるからである。具体的には、国語科の学習指導要領を軸にした教科目標や指導内容を念頭に置きつつ、学生が模擬授業を順番に実施できるようになる。模擬授業の流れ（パターン）を大きく捉えると、①模擬授業（15分）、②振り返り（感想・意見を学修記録に記入、5分）、③学びの交流・共有（10分）、④講評（10分）の4段階のプロセスを1講義当たり2回転する構成（2名の教師役が各々①から④を回す仕組み）にしているが、これをほぼ毎講義の都度、反復訓練していくことになる（15回講義のうち10回程度をこのパターンで回し、2回ほどは“45分の長時間授業”も実施）。こうしたプロセスを毎回の講義で繰り返し、協働しながら学びあうことを通じて、学生には、将来、教員になった際に必要となる以下の3つの基本動作（学びのプロセス）を修得してもらうことを狙っている。

(3) “協働的な学びのプロセス”の意識化

言葉の力を育むため、教員にも、児童にも3つの学びのプロセスが大切となる。それは、①自分の考えを持つこと、②自分の考えを書くこと（言葉にして表現できること）、③自分の考えを軸に発言することである。この思考・表現のプロセスを自分の学びのスタイルとしてどう修得するか——既に述べたように、教員の一方通行的な口頭説明だけでは、体の芯まで染み込んでいかない。協働的な学びのプロセスを通じた模擬授業を展開し、それぞれが目の前に児童がいることを想定した実践形式で繰り返し行うことで、初めてそれら3つの能力が磨かれ、定着を図っていくことができると考えている。

3. 就業力とは縁遠い講義でも、就業力強化に紐付けする技術

大学で開講している講義をみると、就業力に非常に紐付けやすい講義（経営情報学部・短大BC系の講義）もあれば、紐付けが難しいように思われる講義（文学部系）も混在している。そうした下、“就業力”と最も距離感があるようにみえる文学部講義（英米文学関連の講義）で就業力強化の講義を展開されておられるのが、国際文化学科の阿部教授である。

【阿部流・教育内容】

※以下は阿部教授のお話を直接話法調で記載した。

(1) 学生に欠けている社会人としての基本資質を強化する講義設計

今の学生は、あふれる情報に頼りすぎ、“自分で考える訓練”が不足していると感じている。これではとても社会で生きていけないのである。具体的には、「状況・読めず」「相手の心・読めず」「社会的要請・知らず」「どう行動すべきか・わからない」——これは社会が欲しがるといえるような人材ではない。

では、今の学生に課題として求められるのは何か？——それは、自らの力で、状況を読み、相手の思い、社会の要請を踏まえ、どう行動するかを考える力を磨いていくことであるが、これはまさに就業力教育が求める要素そのものと言える。

問題は、それを講義の中でどう強化するかである。

英米文学の講義（＝阿部先生担当）では、文学作品を題材に、学生どうして対話を繰り返させることで、そうした力を磨いていく仕組みを入れ込んでいる。まず、教員が、英米文学を読み込む前に、その作品が書かれた時代背景を理解させるために動画や写真を示す。これにより、学生は文学作品が作られた当時の社会、風土、文化、人々の考え、空気感を手触り感をもって理解しはじめる。その上で、学生に、登場人物の思い・考え方を推察させるが、これを、個々の学生に自分で考えさせるのではなく、二人ペアで考えさせる。それは、就業力教育の一つの要素として掲げているコミュニケーション力を磨かせるためである。

(2) 多面的思考を深めるための対話を粘り強く繰り返す

戦争が人に落とした心の影を主題とする作品の場合を例にとれば、まずは文意を理解することが基本になる（要すれば、この文章って、どういう意味？という問いに答えられることが基本となる）。それに加え、行間に込められた作者の意図を読むこと（隠された思いは何？という問いに答えられること）、作者のメッセージやテーマを読むこと（作者は何を伝えたい？という問いに答えられること）にも配慮する。勿論、学生側が自力でゴールに辿り着くことは容易ではない。そこで、教員側は、ゴールに辿り着くため、様々な「謎解き」用の質問を用意することになる。具体的には「どの国の話？」「どんな時代の話？」「時代背景と物語の関わりは？」「この先、どんな展開になりそう？」等の問いかけである。

文学作品というものは、本来、既述のような質問を、読み手本人が自分で用意し、自問自答しながら自分で考えて読むのが基本となる。しかし、「自分で考えるトレーニングをしてこなかった」学生が少なからず存在する中で、教師がこうした学生に対して、①考えを深めるヒントを与えたり、②答えが1つではない問いに向かって、学生が多面的に考えを広げていくための思考の選択肢を提示することが大切であるように思う。換言すれば、学生の頭の中を耕すような思いで、教師が学生との間で対話を粘り強く繰り返すことを通じて、学生自身が自力で考

える力を身に付けていくように促していく——これも教育の一つのあり方ではないかと考えている。

4. 多人数講義でアクティブ・ラーニング（グループワーク）を展開する技術

学びの効果を高めるための一つの方法として、大学が推奨するのがアクティブ・ラーニングであるが、多人数の集団講義では、討議グループを作るにしても、その数が多過ぎて、教員一人では掌握・統率が効かないという理由で「現実的には難しい」と考えてしまいがちである。しかし、40～50人規模でも上手にグループ討議をこなし、アクティブ・ラーニングを回しておられるのがメディア情報学科の近藤准教授である。

【近藤流・教育内容】

※以下は近藤准教授のお話を直接話調で記載した。

グループ討論型講義（アクティブ・ラーニング）は、学生人数に関わらず、「事前のお膳立て」さえ上手くやれば成果を上げることが可能である。例えば、「都市計画の今後の課題」をテーマにグループ・ディスカッションを学生にさせる場合、教師側が、まず事前の予備知識を講義で説明した後、学生に対して「さあ、自由に討論をどうぞ」では、学生は対応困難になってしまう。学生が有効な討議を促すための仕掛けを講じておくことが必要になる。具体的には、学生同士の討議が円滑に進むための事前の仕掛け（お膳立て）が不可欠になってくる。事前のお膳立ての一例としては、都市計画に関する①現実、②理想、③両者の“乖離”に関する説明で、この3点について教員が予め主要な論点を整理しておき、これを学生に示す。その上で「③の乖離を埋めるにはどうするかを考えましょう」と誘導する形を取る（いわば学生が走りやすい道筋を敷いて、学生がそのうえを走るように背中を押してやるのが教員の役目になる）。要すれば、学生の能力レベルを念頭に、いきなり難しい討議を強いるのではなく、彼らの“身の丈に応じた課題”に仕立て直して背中を押してやる工夫さえすれば、多少、人数が膨らんでも、アクティブ・ラーニングを実践することは可能になる。

IV. まとめ

上記で示した様々な知見はピカピカと光を放つ価値ある教育ノウハウであるが、出所は僅か10名の先生方である。しかも、その先生方がお教えくださった多くのノウハウのごく一部を、紙幅の関係で筆者が恣意的に切り出したものである。本学は160名強の教員で構成されるが、恐らく多くの先生方がまだまだ想像もつかないノウハウをお持ちのはずである。そういう意味では、この組織の中にまだまだ珠玉のノウハウが金塊のように埋もれているとみる。今後とも、我々はこれら金塊を掘り起こし、教員間で共有する活動を継続することが求められるのではないか。そして、こうした活動を継続的に積み上げることで、本学の教育レベルが少しずつ改善していくように思う。ただ、それには条件がある。小川教授の考え方（「わかる」ではなく「できる」と重なるが、大切なことは、共有した知見を学んで終わりにするのではなく、個々の教員が実際の講義に着実に落とし込んでいくことである。同時に、講義がどの程度改善したかを授業評価アンケートの満足度評価の数値で点検していくことが重要である。勿論、満足度評価は様々な歪みもある数値であることは重々承知しているが、やはり、学生が「良い講義だ」と感じれば高い点を付与するだろうし、「今一つだ」と思った講義には高い点は付与してくれないという実態がある。となれば、これを一つの目安にしながら、授業に改善を加えていく地道なPDCA活動を回していくことが教員に求められる大きな責務だと思われる。

V. 謝辞

最後になったが、今回、多忙の中、ヒアリングにご協力下さり、様々な講義ノウハウを教えて下さった10名の先生方に心より御礼申し上げたいと思う。なお、本稿では、各先生方から窺ったお話をほぼ忠実に再現することを心掛けたが、筆者の力不足ゆえに、事実誤認や解釈間違い、不適切な表現があるかもしれない。その場合は、責任はすべて筆者に帰属することは言うまでもない。

以上

注釈

- 1) ヒアリングにご協力いただいた先生方は以下のとおりである。

文 学 部	阿部 曜子 教授 (国際文化学科) 森上 洋光 教授 (書道文化学科)
経営情報学部	疋田 光伯 教授 (経営情報学科) 近藤 明子 准教授 (メディア情報学科)
生活科学部	岩田 晴美 教授 (健康栄養学科) 後藤涼子准 教授 (児童学科)
看護学部	小川 佳代 教授 (看護学科) 田村 綾子 教授 (看護学科)
短期大学部	坂本 寛 教授 (人間健康科・食物栄養専攻) 川内 由子 教授 (音楽科)

- 2) “Knowing” “Being” “Doing” という言葉遣いは、ハーバード・ビジネススクール等、欧米の経営系の大学院が、近年、“社会で自力で生き抜い

ていくために必要な力” (本学で言う就業力) として、教育方針の一つとして活用している言葉である。オリジナルはThe West (米国陸軍士官学校) の教育方針と言われている。

- 3) Beingの語義については、本学の川端新講師 (文学部・国際文化学科) から、背後の考え方も含め、ご教示いただいたことを記載したつもりであるが、もし解釈がずれている場合は、それは全て筆者の理解力と表現力の拙さによるものであることをお断りしておきたい。

参考文献

ハーバードはなぜ日本の東北で学ぶのか 山崎 加著 ダイヤモンド社